

## II 企画展「装いの横浜チャイナタウン—華僑女性の服飾史」 関連講演会

### 講演 2

#### 装いの横浜チャイナタウン —— 服飾から見る華僑の歴史 ——

講師 伊藤 泉美\*

みなさんこんにちは。横浜ユーラシア文化館の伊藤と申します。本日はお越しいただきまして誠にありがとうございます。企画展を担当した者といたしまして、このように大勢の方々に関連講演会にお越しいただき、本当にありがたいことだと思っております。

今回、そもそもなぜ「装いのチャイナタウン」という展示をすることになったのかということですが、ここ7、8年、横浜中華街のみなさまから、1970年代以降の服、旗袍をご寄贈いただいたり、あとご紹介いたしますが婚礼衣装をご寄贈いただいたりしてありました。そこで、歴史を服飾から見たらどうなるのか、服飾から華僑社会を見たらどうなるのか、と思い当たりまして、「装いのチャイナタウン」ということになりました。ただ、私は服飾についてはまったく専門外でしたので、先ほどお話しいただいた広岡先生からいろいろご指導いただいて、なんとか形になりました。改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

今日の話は三つのパートに分かれます。一つは歴史の部分です。いきなり装いに行く前に、そもそもなぜ横浜に中国人がいるのか、中華街があるのかという「横浜への中国人の進出」についてお話して、そのあと第2部で「横浜華僑女性の服飾変遷」についてお話ししたいと思います。最後に「母の肖像」として3人の方をご紹介しながら話を進めていきたいと思っております。

### 1 中国人の横浜進出

まず、中国人の横浜進出です。いったいつから横浜には中国系の方がいらっしゃると思われませんか。横浜は今からちょうど160年前、1859年7月1日に開港しました。本日は2019年の6月9日ですので、時計の針を160年ぐらいグルグルと巻き戻しますと、このあたりは突貫工事中ですね。開港場になるところです。現在みなさんがいらっしゃる日本大通り、山下町は、それまで横浜村だったところを必死に土木工事をしている最中です。今回の展示も開港160年ということで企画いたしました。それだけの長いあいだ、中国系の方たちの歴史が横浜で紡がれてきたわけです。



図1 『横浜異人館之図』  
(南京へや部分)  
1862年  
横浜開港資料館所蔵

この資料、『横浜異人館之図』は、幕末の外国商館のようすを描いた浮世絵です。みなさまから見て右側に「亜米利加へや」と書いてあって、左側に「南京へや」(図1)があります。拡大してみると、ここに写っているのは中国人と日本人がそろばんを弾いて何やら仕事をしている様子です。

つまり、なぜ横浜に中国人がやってきたのか、その一番の大切な理由は貿易の仲介者としての役割です。イギリス人、アメリカ人、フランス人といった西洋人は日本語がわかりません。当時、彼らは中国

\*Ito Izumi 横浜ユーラシア文化館副館長・主任学芸員

から横浜の支店に進出してきますので、香港や広東、あるいは上海で雇っていた中国人を連れてきます。日本人とは漢字で筆談ができます。この浮世絵が如実に表しているのですが、アメリカ商館であっても日本人と中国人が実際には仕事をしていたことがわかれると思います。貿易の仲立ちをする商人としての役割です。

でも、それだけでしょうか。それだけではなく、もう一つの役割がありました。それは中国人の職人としての役割です。洋服とか洋建築、あるいは英字の印刷といった西洋の技術を伝えています。なぜかと言いますと、当時の日本人が習得していなかったそれらの技術を使い、横浜の外国人居留地に暮らした欧米系の生活、衣食住を支えたのです。ということで、そもそもなぜ横浜に中華街ができたのかと言いますと、横浜に160年前に港が開かれて、貿易商あるいは職人としてやってきたということが言えると思います<sup>(1)</sup>。

## 2 横浜華僑女性の服飾変遷

このような歴史だけで見ていると、服飾とか女性の姿が見えてきません。次に今日の主題として、横浜華僑女性の服飾変遷を追ってみたいと思います。1860年代から現代まで、これは長い期間ですが、およそ三つの時期に分かれるのではないかと考えています。1番目に、ツーピース型の「上衣下裳の時代」が幕末から1920年代です。2番目が「旗袍の普及」ということで、1920年代後半から1945年ぐらいまで。3番目が1945年以降現代までが「旗袍から洋服へ・普段着から晴れ着へ」の時代ではないかと考えています。

### (1) 上衣下裳の時代——1860年代～1920年代初頭

まず、ツーピース型、上衣下裳の時代というのは、幕末から1920年代半ばぐらいまでです。先ほど広岡先生がおっしゃったように、清朝時代の漢族女性の

服装を横浜の中国人が着ていたということが、今回の展示で浮世絵や写真などを調べてみた結果わかったことです。

たとえば、先ほどお見せした浮世絵を再度見ると、1人だけ中国人の女性が描かれています。先ほど言った「南京へや」の中です。上着、上衣が緑で下の部分は赤いズボンを着ていて、たしかにゆったりとした身頃の幅があって典型的な漢族女性の姿をしていたことがわかります。

また、貞秀という、とても人気のあった浮世絵師が描いた『横浜開港見聞誌』という当時のベストセラーがあります。当時の横浜は、日本人から見ると極めて珍しい外国人の姿が見られるということで出された本ですが、そこに「南京人異商に雇れ横浜に来るの内此図ハ南京婦人の躰」と書いてありまして、中国人のベビーシッターを描いています。乳母車を引く中国人女性の姿です。ちなみにこの洋犬というのもハイカラというか、西洋の、横浜ならではのアイコンとして出ています。

浮世絵に描かれているだけでは、もしかしたら少し絵師の思いが入っていて違うのではないかと考えて、写真は何かないかと探してみました。ところが正直に言って、中国人の女性人口が1870年代以降は非常に少なく、5パーセントぐらいです。圧倒的多数が出稼ぎの男性なので、女性の姿自体があまり見つけられません。そのなかで一つ見つけたのが、山下町にあったドイツ系のアーレンス商会の写真です。中国人のベビーシッター、阿媽が写っていて、ゆったりとした身頃を着て、下にズボンを着ている。やはり同時代の清朝の女性たちと同じような格好をしていたことが認められます。

先ほど広岡先生のお話で、1910年代から1920年代になると身頃がスリムになっていくというご説明がありましたが、横浜の場合はどうなのか。

あまり女性の姿が写っているものがないですが、そのなかで非常におもしろいのがこの1枚の絵はがき(図2)です。これは横浜中華街大通りの1921年

(1) 詳しくは伊藤泉美『横浜華僑社会の形成と発展—幕末開港から関東大震災復興期まで』(2017年、山川出版社)、伊藤泉美・西川武臣『開国日本と横浜中華街』(2002年、大修館書店)を参照されたい。

のもので、一見カラー写真のように見えるかもしれませんが、あくまでモノクロのプリントに手彩色をしたものです。1枚1枚色を施していくもので、乾かないうちに色を塗ったりするので、非常に美しい、カラー写真のようにも見えます。



図2 横浜中華街大通り 1921年 横浜開港資料館所蔵

手前に女性が2人写っています。袖がラップ袖ですが、こうして丈が短くなってきています。でも、これはズボンのままなので、広岡先生に見ていただくと、「これは労働者階級でしょう」ということでした。スカートを穿いていないですよ。ただし、おしゃれにハイヒールを履いています。1920年代らしく丈が短く、ラップ袖になっている。黒くて見づらいですが、右側のこの女性もほぼ同じような服装をしているのではないかなと思います。

ただし、黒い服を着ている方の足元を見ますと、この人は纏足に革靴をはいているのではないかという状況です。左の人は明らかに普通にパンプスを履いている感じですね。1921年はこのように本国の状況とシンクロしていた。比較までに、先ほどの1870年代のベビーシッターと比べてみると明らかに違いがあって、その違いが同時代的に横浜にも展開していたことがわかると思います。

私はこれまで中華街の展示を何度か企画するなかで、一所懸命に写真を見てきたつもりだったのですが、服装にはこれまで注目していなかったもので、新たな目で見てみますと、逆に「この服を着ているからこ

の年代なんだ」ということがわかってきました。

### 1923年の関東大震災

このように1920年代に変化していく中で大事件が起こります。それが1923年の関東大震災です。中華街は、先ほどの絵はがきにもありました通り、レンガ造りで鉄骨が入っていない建物が並んでいたもので、瓦礫と化して焼失しました。横浜市内全体で5,700人余りの中国人が住んでいたのですが、1,700人ぐらいの方が亡くなって、その他の方も神戸や大阪、長崎に避難したり、あるいは香港や広州、上海に一時避難したりしました。

家が燃えていますから、着の身着のままですよ。これはまだ私の仮説であり想像ですが、1920年代という服装の変化が本国で起こったときに関東大震災があって、着の身着のままだった大勢の人が本国に逃げるわけですね。避難した先からすぐ帰ってきた人もいますし、数年過ごした人もいます。そこでもしかしたら新しい服装に出会ったのかなと想像しております。

### (2) 旗袍の普及——1920年代後半～1945年

次は、第2期の旗袍の普及の時期です。1920年代後半から1945年ですが、この間、旗袍が横浜で普及していきます。例えば、震災10年後の1933年の中華街の絵葉書に1人女の子が写っています。小さい女の子ですが、ワンピース型の旗袍を着ている姿が写っています。この当時の写真というのは、絵はがきですとはがきを送った先に残っているのですが、生の写真はほとんど残っていません。と言いますのは、1945年の横浜の大空襲で燃えてしまったからです。そのなかで、今回の展示でも写真をご紹介しますが、たいへん珍しいケースが鮑家です。横浜で鮑家は幕末明治の頃から続く家系ですが、戦前の聘珍樓を経営していた一家も鮑家です。中華街にご自宅があっただけではなく茅ヶ崎にもご自宅があったので、茅ヶ崎の家が空襲を受けずに残りました。

それでたいへん貴重な写真があり、横浜開港資料館に寄贈していただきました。

服装に注目して鮑家の写真を見てみますと、これは極めて面白いことがわかりました。図3の左側に立っているお嬢さんはワンピース型の旗袍を着ています。これは中国で1920年代に生まれた、先ほどのお話にあったようなAラインで、袖の幅が広くて、また衿もタートルネックに近いような、どちらかと言うとワンピースに近いようなものです。おそらくスリットはないか、ほんのちょっとかという状態だと思います。

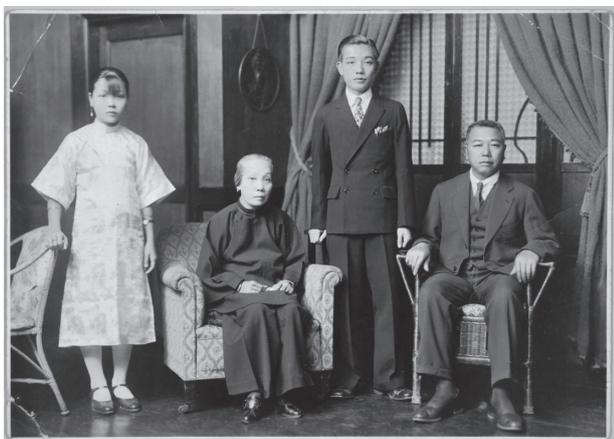


図3 鮑家の家族写真 1925年頃  
鮑啓東氏寄贈・横浜開港資料館所蔵

かたや隣に座っている年配のお母さんは、清朝の時代の典型的な上下で分かれているツーピース・タイプを着ています。ということで、本国で女性の服装変化が起こっていたその状況が、横浜でも同時代的に起こっていたことを示すたいへん貴重な写真であることが、今回初めてわかりました。



図4  
鮑家婚礼  
写真 1935年  
鮑啓東氏寄贈・  
横浜開港資料館  
所蔵

また、鮑家と譚家との婚礼が1935年11月に行われました(図4)。このとき男性はみんな洋服ですが、女性を見ると花嫁さんはウェディングドレスを着ていて、このあと中国的なものに替えたかどうか確認が取れませんが、お義母さんは旗袍を着ています。前列の右から二人目の方は和服、留め袖を着ています。これは新婦のお母さんです。日本人なんですね。伝統的というか、幕末のころから横浜では、お母さんが日本人という方は多くいました。そうすると華僑の女性も和服を着たりしています。横浜ではこの時期、1945年までは旗袍が普及してくる時代です。



図5 1942年 横浜中華街 芳賀日出男氏撮影

図5の写真が撮影されたのは、1942年ですが、横浜中華街では旗袍自体が「およそゆき」、新しいファッションというよりも、すでに普段着になっていました。1940年代で丈が長くなっています。これは学校から子どもたちが出てくるのを待っているお母さんですが、こうした普段着としての旗袍が普及していったことがわかると思います。

そして、1945年5月29日の大空襲で、横浜中華街は、再び焼け野原になってしまいました。

### (3) 旗袍から洋服へ・普段着から晴れ着へ—— 1945年～現代

服飾の流れの第3期は1945年から現代にいたる間で、旗袍から洋服への時代、また普段着から晴れ着への時代と考えられると思います。一面焼け野原とはなった中華街ですが、戦後の復興も早く、1955年

2月に横浜の観光復興の目玉として中華街の入り口に牌楼ができます。この1955年ごろの横浜華僑女性の服飾状況はどうだったか。



図6 1956年 横浜関帝廟  
広瀬始親氏撮影寄贈・横浜開港資料館所蔵

図6は1956年の関帝廟です。現在は燃えてしまった第3代関帝廟のところで関帝誕が行われています。前に2人の女性がいますね。この方たちは旗袍を着ていますが、裸足にサンダルをつっかけていて、これはどう見てもドレスとは言えません。「チャイナドレス」と言われる前の普段着として着ていたころの旗袍です。スリットはセクシーに見せるためではなく、動きやすさのためについている。1950年代、1960年代ぐらいまでは、普段着として着ている方が多かったのではないかと思います。ところが、まったく同じ場所で同じ時に撮った別の写真には、ボディ・コンシャスに近いような旗袍を着た女性が写っています。二つのスタイルの旗袍が1950年代から1960年代に併存していたということがわかるかと思います。

### 旗袍の変化 1950年代～70年代

旗袍の変化については先ほどご紹介されていたので簡単にしますが、1950年代から変化していきます。その要因の一つは、つくる側にあつたと思います。モードの拠点が上海から香港に移動して、洋裁の要素が入ってダーツを多用するようになって、裁

断の仕方も変わってくる。もう一つは着る側の要素です。横浜について申し上げますと、洋装化が進展していきます。戦前の日本人が、普通に和服を着ていたのが戦後急速に洋服になるのと似ているかと思っています。旗袍は普段着から晴れ着になって、また1970年代、1980年代は中華街で婚礼行事が盛大に行われまして、披露宴が昼と夜とあったり、新婦側と新郎側で日をかえて開いたりしました。そのときにはみなさん美しいドレスをつくっていたとお聞きしています。

ただし1950年代の横浜でも、夏貞素さんがつくられたものは、前身頃、後ろ身頃がつながっていた伝統的なもので、首のところがやはり付け替えられます。この夏さんは戦前から横浜にいらっしゃった方で、1945年の大空襲で左手首から先を飛ばされてしまうんですね。でも戦後も華僑女性のためにそういう旗袍をつくりました。戦後の立体的な裁断は、たとえば、1973年の香港で符順和先生がつくられた旗袍です。学校の教師をなさっていた方なので潔いブルーの旗袍です。こちらはダーツをたくさん取った立体的なものです。1960年代、1970年代になりますと、本当に体の線にピタッと合った旗袍が主流となってきます。

### 婚礼衣装

ここから婚礼衣装の話をしたしたいと思います。展示アンケートでも「婚礼衣装に目を引かれた」という声が多かったです。今回は五つの褂を展示してあります。これが民国になって以降、上着がスリムになってきたのに合わせてできた礼服とされています。上が黒で下が赤で、結婚式以外にも着ますが、主に婚礼のときに着るものです。これも横浜の華僑は早くから取り入れていたのかなと思います。1907年の李家と羅家の結婚式のときに花嫁さんが着ている上着が、少し似ているような気がします。ただし、下にウェディングドレスを着ているので、中洋折衷かなと思います。

図7の黒と赤の褂は、1940年頃の広東系の鮑家の褂ですが、これについては今日お配りしたニュースレターに詳しく書いてあります。広東系の鮑家が—先ほどの鮑家とどうも親戚関係だったようなのですが、神戸にお嫁に行くときにつくったもので、上海でつくっています。これは廣東會館俱樂部から寄贈を受けたものです。



図7 褂 1940年頃  
廣東會館俱樂部寄贈・当館蔵

もう一つ今回の展示で紹介しているのが、三代の褂ということで、広東系の方のものです。1961年に符優和さんが結婚されるときに香港から購入されたものです。それを20年後に娘さんの李艶薇さんが着て、さらに約20年後にお孫さんの陳美瑛さんが着たものです。

広東系と上海系の違いは何かということなのですが、先ほどのものと比べてみますと、裾模様に違いがあります。広東系はモールがあります。こちらは上海でつくられたものですが、裾のモールがない。またこちらは牡丹などの花模様ですが、広東系になると鳳凰や龍の模様になる。

今回もう一つ、広東系の容家が1970年頃に香港から購入した褂も展示しております。この褂は上下が黒赤ではなくて、上下とも赤の褂になっている「紅褂」ですが、赤の生地が見えないぐらいビッシリと刺繍が施されています。極めて重たいものです。こ

の褂を4人の女性が着たとされています。

横浜の華僑の場合は戦前から、式ではウェディングドレスを着て、お色直しで褂を着るというパターンが多かったようです。

婚礼衣装のもう一つは、なんと言いましても今回展示のポスターやチラシでもご紹介させていただきました、張方廣さんと陳卓華さんの結婚式のときに花嫁の陳卓華さんが着たものです。いまからちょうど90年前の11月の結婚式です。



図8 張陳卓華婚礼  
衣装 1929年11月  
張雅齡氏所蔵

この旗袍を初めて広岡さんに見ていただいたときに、目が爛々と輝いて「これは珍しい」とおっしゃったんですね。なぜかと言うと、この張家、陳家は寧波から来た上海テーラーで、華東系、中国の真ん中ぐらいの上海系の方たちです。上海系の方たちの婚礼衣装ですが、上海系の方たちではあり得ない要素が入ってしまっているということです。すでにみなさんおわかりだと思うのですが、何でしょうか。そうですね。裾に銀モールが入っている。広東系と上海系の融和で、「これは本国ではあり得ない」ということで、広岡さんが目を爛々と輝かせていました。「横浜ならではのものが出てよかったかな」と私も本当にほっとしました。張家のみなさまは今日いらっしゃっていますが、本当に貴重なものをありがとうございます。

### ブラックフォーマルの旗袍

もう一つ横浜ならではのものとして、ブラックフォーマルがあります。今回の企画展のために中華街のみなさまに多くの旗袍ご提供いただきましたが、ほとんどの方が黒の旗袍をお持ちなんです。私の頭の中では、中国系の方はあまり黒は好まない、特におめでたい席には黒は着ないという発想があったのですが、横浜の華僑の方は喪服としてだけではなく、改まった席に黒を着るということを知りました。

これは楊順花さんのものですが、紐ボタンが非常に美しいものです。ちなみに本日私が着ていますのは、いま82歳になる母が1975年に仕立てたブラックフォーマルのジャケットです。ちょうどこの時期は日本全体でブラックフォーマルが流行っていました。本来はこの下は黒のワンピースでして、やはり同時代的に、1970年代は日本人もブラックフォーマルが流行しまして、やはりそういったことが華僑のみなさんにも影響している、日本の状況が影響しているのではないかなと思っています。

## 3 母の肖像

最後に、母の肖像ということで少しお話ししたいと思います。旗袍を着こなしてきた横浜華僑女性たちをご紹介したいと思います。

### 区朱秀顔氏 (1912~1996)

今回の展示で「母の肖像」というコーナーをつくらうと思ったきっかけが区朱秀顔さんの写真です。中華街で楊貴妃という洋品店を営んでいる区傳宗さんのお母様で、小さい坊やが現在はもう70歳近い区傳宗さんです。1955年、息子さんと写っている写真です。そのいかにも良妻賢母である真剣なまなざしが良いなと思ったんですが、この同じ旗袍を着ているもう一枚の写真では手にタバコを持っている。これもまたカッコいいなと思いました。どうもある結婚式が終わった後、麻雀仲間のみなさんと歓談をし

ている状況だそうです。母のさまざまな横顔が見られて良いかなと思います。この写真は大好きな写真で、展示室の入り口に飾ってあるのですが、みなさんお知り合いの方々がお話しされて話題沸騰の1枚です。

### 葉肖麟氏 (1915~2014)

もう1人、今回「母の肖像」でご紹介したのが、葉肖麟さんという方です。葉さんは1915年横浜生まれです。1923年の関東大震災も1945年の横浜大空襲も体験されています。私も20年ぐらい前にお話をうかがいました。震災のときに朝鮮人虐殺の現場をご覧になった話とか、空襲でどうやって生き延びたのかという貴重なお話をお聞きしました。葉さんはご主人の呉笑安さんと戦後は順海閣というお店で成功されて、戦前は非常に苦勞なされたのですが、戦後はたいへんな成功を収められました。

香港でつくられた旗袍をたくさんお持ちで、そのうちのいくつかをお借りして「母の肖像」のところで展示してあります。大きな紐ボタンがお好みだったようで、花の形の紐ボタンをしたものがたくさんございます。

### 李全英氏 (1921~2019)

もう一方ご紹介したいのが、李全英さんです。李さんは1921年に寧波近くの浙江省寧海県に生まれ、9歳で両親の暮らす横浜へ、親戚のおばさんに連れられてやってきました。1942年、横浜でピアノをつくっていた李兄弟ピアノ製作所の長男李民華さんと結婚しました。1945年、横浜大空襲でピアノ製作所が焼失して夫は仕事ができなくなってしまったので、戦後は全英さんが毛糸店を経営して一家を支えました。李全英さんの若い頃のお写真がこちらで(図8)、今回のポスターで使わせていただきました。戦時中の1940年頃なのですが、旗袍姿で中華街にあった写真店で撮影された一枚です。戦時中ですが、皆さんきれいに着飾って写真を撮られていま

す。おそらく誰かが帰るときに記念で撮ったのではないかと考えられます。1940年代ですので、前列の左側のお2人などは衿がすごく短いですね。



図9 李全英氏（前列右端）と友人 1941年  
中野芳子氏所蔵

また1953年、日光に行かれた時の写真も拝見したのですが、旗袍姿でした。戦後も旗袍を着ていらしたことがわかります。

今回はその内の1着をお借りしました。とても愛着のこもったものです。去年の11月、金沢区のシーサイドライン沿いの高齢者施設にお訪ねしました。私のことはわからなくなってしまっていたのですが、一着の旗袍を娘の中野さんに持ってきていただいたのですが、旗袍のほうに自分の手をのぼして、すごく懐かしいものとして触られるんですね。中野さんと私が写真の話で夢中になっている間に、体はとても不自由なはずだったのですが、気がついたらいつの間にか旗袍のジャケットを着ていたんです。その姿を見て、やはり服というのは単に体を包むだけのものでなくて、その人の思い出や歴史が詰まったものだということをつくづく感じました。

ということで、今回は横浜華僑のみなさんに旗袍をお借りしましたが、私としては服を借りるというよりも、みなさまの人生の一部をお預かりしたという気持ちで展示しています。

## 横浜華僑女性の服飾史

最後に横浜華僑の服飾史をまとめたいと思います。研究を始めたばかりですので、いまのところですが、まずは本土中国との類似性と差異性が認められると思います。時間軸としては、幕末から1945年までは中国本土と同期している、シンクロしている部分が多いと思います。

1945年以降は独自の展開をします。それは本国との交流が断絶することと、本国自体が文革などで旗袍の文化が廃れていく、そのなかで横浜では晴れ着などとして一定の需要があったということだと思います。

時間軸ではそういう問題ですが、特徴としては、一つは地域性が希薄な部分があるのではないかと。地域性といった場合は広東系と上海系といったものですが、希薄あるいは融合が行われていた。たとえば広東系の鮑家ですが、上海で褂をつくってそれを持って神戸の広東系のお家にお嫁に行く。あるいは寧波系の張家の婚礼衣装に銀モールがついているというような問題が指摘できると思います。それは海外華僑社会ならではの問題であって、中国人としての民族性の発露として旗袍を着る部分もありますが、やはり横浜生まれの2世、3世となってくると、本国のときの地域性も少し薄れてくるのではないかと思います。逆に居住地における服飾文化の影響はブラックフォーマルなど、そういった問題が影響してくるのではないかと思います。

今後の課題としましては、横浜華僑の旗袍調査を継続していきたいと思っておりますし、また日本人の旗袍は何だとか、あるいは他地域の華僑社会の旗袍と比較したら興味深いのではないかと考えています。今回は旗袍のいろいろな興味深い面が見られたので、もしできれば、いつになるかはわかりませんが、もう一度いろいろな旗袍の展示もできればなと思っております。ご清聴、ありがとうございました。

## 横浜ユーラシア文化館 第8号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 8

2020年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

[www.eurasia.city.yokohama.jp/](http://www.eurasia.city.yokohama.jp/)

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 朝日オフセット印刷株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Asahi Offset printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2019

ISSN 2187-7734